蓬萊の玉の枝――「竹取物語」から(5)

かぐや姫の昇天とふじの山

帝もたびたびかぐや姫を宮中に迎えようとされましたが、かぐや姫は応じません。やがてかぐや姫は月を見ては嘆き悲しむようになり、翁と媼に、自分は月の都の者で、次の十五日に月からの迎えが来ると打ち明けます。※八月十五日の夜、帝が遣わした兵士たちが守る翁の家に、大空から天人が現れます。かぐや姫は翁と帝に手紙を書き、帝への手紙には不死の薬の入った壺を添えました。

ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、
(天人が)さっと天の羽衣を着せて差し上げたところ、

翁を、①いとほし、かなし、と思しつることも失せぬ。
気の毒だ、ふびんだ、とお思いになっていたことも消え失せてしまった。

この衣着つる人は、物思ひなくなりにければ、車に乗りて、
この衣を着た人(かぐや姫)は、物思いがなくなってしまったので、(天の)車に乗って、

②百人ばかり天人具して、昇りぬ。
(天に)昇ってしまった。

不死の薬の壺と手紙を受け取った帝はひどく悲しみます。帝は、かぐや姫に会うこともないのに不死の薬など何の役に立とうかと、※駿河の国にあるという天に近い山の山頂に、不死の薬の壺を持っていくよう使者にお命じになりました。

御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。
手紙、 燃やすべき旨を ご命令になる。

そのよしうけたまはりて、士ども③あまた具して
(帝の使者が)その旨を承って、 兵士たちを 引き連れて

山へ登りけるよりなむ、その山を「ふじの山」とは名づける。
山へ登ったことから、 名付けたのである。

その煙、いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ、言ひ伝へたる。
いまだに 言い伝えている。

※八月十五日…旧暦八月十五日は中秋の名月の日。
駿河の国…現在の静岡県中央部。

重要語句

いとほし	かわいそうだ・気の毒だ
思す	お思いになる
具す	引き連れる
仰す	言いつける・命じる
あまた	数多く・たくさん

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「いとほし、かなし」とは、誰（だれ）のどのような心情か。適当なものを選びなさい。

ア 翁の、かぐや姫をいとしいと思う心情。
イ かぐや姫の、翁が気の毒でつらく思う心情。
ウ 天人の、翁とかぐや姫の二人をあわれに思う心情。

〔　〕

(2) ――線②「百人ばかり天人具して」が表す意味となるように、次の（　）に補う語として最も適当なものを選びなさい。

百人ほど天人（　）引き連れて

ア が　**イ** を　**ウ** に　**エ** と

〔　〕

(3) ――線③「あまた」の意味を選びなさい。

ア たくさん　**イ** 残りの　**ウ** 再び

〔　〕

(4) 次の中から、本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 天人は、天の羽衣を取って翁に着せた。
イ かぐや姫は、嘆き悲しみながら月に昇っていった。
ウ 帝は、手紙と不死の薬の壺を燃やすよう命じた。

〔　〕